



¡OLE!

Don Quijote, Vol.45 montado en un avión

スペイン各地での
エピソード⑧

texto : Takeshi Shimizu fotos : Mie Shida

バルセロナ

異彩放つ鬼才ガウディの作品群

バルセロナは1992年のオリンピック開催で知名度を上げ、一年を通して世界中から訪れる観光客で賑わうカタルーニャ州の州都です。首都マドリードに次ぐスペイン第2の都市として商工業も発達、港はフェニキア時代から交易の中継地として栄えてきました。その歴史を反映して、ここではスペイン語の他にカタルーニャ語が公用語となり、交通標識なども2言語で表示されています。南のアンダルシア州とは異なりイスラム文化の影響が少なく、町はヨーロッパ風のたたずまいが強いのが特徴です。

もう一つの話はサッカーでしょう。今年、スペインは長年の念願がなつてワールドカップで初優勝しました。そこで目立ったのがリーグ屈指の名門クラブFCバルセロナ出身の選手の活躍でした。多くのチームがあるサッカー王国スペインの中でも、特にマドリードとバルセロナのチームに対する熱狂的ファンの応援風景は、ちょうど巨人(東京)と阪神(関西)の対抗意識みたいなものを感じさせます。

残念ながら、最近のバルセロナはマドリードと同じく、観光客を狙った犯罪が多くなっています。日本で発行されたスペイン観光案内書にも注意が喚起されているのですが、街ですれ違う一部の日本人観光客の身支度は隙だらけ。その行動もこちらから見ると不安な点が多く、“無事故であってくればよいが”と思うこと度々です。ちょうど3月、日本の卒業旅行シーズンでした。観光メッカの一つ、サグラダ・ファミリア教会では、1時間ほどの間に、2組の20人ほどの日本人団体と5組以上のペアまたはグループと出会ったのです。この時期に限って言えば、当地を訪れる観光客の2割から3割は日本人ではないかと推測されます。はるばるスペインを訪ねてきた同胞が、事件に巻き込まれたり、いやな思いに遭って欲しくありません。こちらは多少なりとも海外経験が多く現地事情についての知識もあります。そんな思いから、よけいなお節介りだったかもしれませんが、それなりに注意や

アドバイスをさせてもらったものでした。

観光の詳細はガイドブックに任せるとして、バルセロナはなんといっても「芸術の町」です。サグラダ・ファミリア教会を初め、カサ・ミラ、カサ・バトリョ、グエル公園と奇才ガウディの作品が街のあちこちに異彩を放っています。なかでもサグラダ・ファミリア教会は、建築が始まってからもう100年以上も経つそうですが、未だに完成していません。並んで10分ほど待ち、エレベーター

Sagrada Familia



Casa Batlló

Parque Guél



Barcelona - Gaudi

清水武 Takeshi Shimizu 旅行作家
世界文学紀行を定年後のライフワークに作品の舞台を訪ねている。
東京都・昭島市在住
<http://homepage2.nifty.com/donky/>



で昇った塔の地上30mほどの狭い展望階段の隣には、はるかに見上げるような高いクレーン2基がそびえていました。昔と違って近代的な建築技術も駆使されているのに、工事はあまり伸展している気配はありません。ゆっくりと、のんびりと…「あと100年かけてじゃないの?」とそんな冗談が飛び出してくるような雰囲気です。

他にも、ピカソ美術館、ミロ美術館、カタルーニャ美術館、バルセロナ市歴史博物館と、見応えのある美術館や博物館が目白押しです。特に、ピカソが少年時代から大人になっていく過程の作品群は、氏の覆い隠しがたい才能と人間くささがミックスされていて、ひときわ興味と関心を引かれたものでした。バルセロナは何よりも、作りのものが芸術的で、精神的・文化的な肥やしを与えてくれる都市なのです。

さらにバルセロナ旅行を楽しむためのTips

バル「Tapa Tapa (タパ・タパ)」は某有名ガイドブックにも載っているような有名店だが、アクセスもよく、メニューも全て写真付きでとてもわかりやすく、ショーケースから自由を選べるので、スペイン語がわからなくても大丈夫。美味しいバルは他にいくらかもあるが、盛り付けの可愛らしさと頼みやすさは魅力。テラス席もある。デザートはカタルン名物クレーマ: カタラナ(クレーム・ブリュレ)がおすすめ。



Tapa Tapa

Passeig de Gràcia,
44, Barcelona
Tel. (93) 488-3369
7:45 a 1:30
Vie. 7:45 a 2:00
Sáb. 8:30 a 2:00
Dom. 9:30 a 1:00
www.angrup.com/tapa/restaurante-barcelona

文・写真/志田実恵(編集部)
texto y fotos: Mie Shida